

フルトヴェングラー・センター® The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1st October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

Newsletter No. 63 / 会報第 63 号 2022 年 5 月

フルトヴェングラー・センター会員の皆様、

桧山浩介氏寄贈の SP の CD 化プロジェクト、桧山コレクションが一段落し、新たにヘニング・スミット（オルセン）氏寄贈のテープをデジタル化して CD 化、さらにハイレゾ音源の配信を開始しました。まず、その第 1 弾の制作・発送が遅れましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。提供テープの音のクオリティは様々ですが、オリジナルテープからの孫世代のものが多く既発市販品に比べても遜色がなく、また聴衆ノイズも一切処理をしていないものですので十分にお楽しみいただけるものと思います。さらにご期待ください。

また、長らく中断をしていたレクチャーコンサートについても、コロナ感染状況を見ながらなるべく早く復活させたいと思っています。決定次第改めてご連絡差し上げます。

会報 63 号は以下の内容でお送りします。

目次

- | | |
|----------------------------------|--------------------|
| 1. 新譜 CD 頒布のご案内 | P. 2～ 5 |
| 2. 桧山コレクション既リリース分についてのご感想 | |
| ロンドンの第 9 WFFC-0301R | 会員 田井 竜一 氏 p. 6 |
| | 会員 末廣 輝男 氏 p. 6～ 7 |
| ロンドンの第 9 WFFC-0301R その他 | 会員 長谷川 健 氏 p. 7 |
| | 相談役 鈴木 芳雄 氏 p. 7 |
| 1952 年 12 月 7,8 日ライヴ WFHC-035/8 | 会員 田井 竜一 氏 p. 8～13 |
| （巨匠ならではのプログラムを聴く） | 会員 高橋 徹 氏 p.13～15 |
| センター頒布のハイレゾ音源を聴いて | 会員 加藤幸広 氏 p.16～18 |
| バイロイトの第九センター盤 SACD その他（匿名希望） | p.19 |
| 3. <寄稿> フルトヴェングラーの珍しいレコード | |
| センター テクニカル・アドバイザー 清水公典 | P.20～22 |
| 4. フォノイコライザー新製品 EQ-100（オーロラサウンド） | |
| のご紹介と特別販売のご案内 | p.23 |

新譜 CD 頒布のご案内

センター会報第60号で「オルセン・ディスコグラフィ」の編纂者として、またフルトヴェングラー研究家、デンマーク・フルトヴェングラー協会の創設者・会長として、世界的に著名な Henning Smidth (通称オルセン) 氏から、氏のオープンリール・テープコレクションをすべて寄贈いただいたことをお知らせしました。これらの貴重な資料を、十分に整備したテープデッキを使用して、慎重にデジタル化して会員の皆様に提供しています。

今回はこの中から

1950年10月1日、コペンハーゲンでウィーン・フィルを指揮して行った演奏会から

シューベルトの「未完成」とベートーヴェンの「運命」

及び、

1949年12月18日及び1954年4月27日のベルリン・フィル定期演奏会の全曲目を4枚組のセットで頒布します。この両日に共通するのが

ブラームスの交響曲第3番

です。5年の歳月を経て行われた演奏を、両日の全演奏曲とともに、じっくりとお楽しみいただきたいと思います。前回 WFHC-035/8 でと同様、**当日の演奏会プログラム**を (CD ケースに合わせた縮刷版ではありますが) **両方とも付録として添付します**。(なお、この演奏会プログラムは元ベルリン・フィル広報部長、現ドイツ・フルトヴェングラー協会会長 ヘルゲ・グリュネヴァルト氏の提供によるものです。)

このシューベルトの「未完成」は昨年ワーナーから発売されたボックスセットに新発見音源としてリリースされたものと同一音源です。音源所有者は Henning Smidth 氏でワーナーに懇願されて先行発売を許可した経緯があります。

オリジナルは19cm/秒2トラックのテープです。この録音の現存する唯一のテープであり、オリジナルのコピーそのものです。左右のチャンネルに同じ音声記録されているものの、チャンネルによってはレベル変動が大きいところがありますが、良好な側の音声を使うなど入念なマスタリングを施しました。

この演奏会は1950年10月1日デンマーク・コペンハーゲンの Odd Fellow Palæet でおこなわれたもので、1950年9月25日スウェーデンのストックホルムを皮切りに10月22日スイスのベルンに至るウィーン・フィルとのヨーロッパ大演奏旅行の一環です。



当日のプログラムは前半がケルビーニの《アナクレオン》序曲、シューベルトの《未完成》、後半はリヒャルト・シュトラウスの《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》、最後にベートーヴェンの《運命》でした。残念ながら《アナクレオン》序曲と《ティル・オイレンシュピーゲル》は録音が残っていませんが、遺された2曲はフルトヴェングラーの意欲とウィーン・フィルの美音がマッチした名演奏・名録音です。特に《未完成》は現存する唯一のウィーン・フィルとの全曲ライヴ録音ですので、ウィーン子孫のシューベルトを奏でるウィーン・フィルが大切に演奏しているのがはっきりと分かります。

後半の《運命》もこの演奏旅行の初日の演奏会、ストックホルムでの9月25日での演奏との比較も大変興味深いものです。なおこの9月25日の演奏会はセンターで全曲目をCD化しています。(WFHC-009/10) 一時品切れしていましたが、海外在庫を逆輸入して少数頒布中です。ご興味のある会員の方はこちらもぜひお求めください。

**1. WFHC-039 1950年10月1日コペンハーゲンでのフルトヴェングラー
シューベルト : 交響曲第7番(8番) 口短調「未完成」D759
ベートーヴェン : 交響曲第5番 八短調 作品67**

(録音 1950年10月1日 Odd Fellow Palæet)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮：ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

頒布資料代：**CD-R 1枚 WFHC-039** **頒布価格 2,000円** (送料込み)

ご購入いただいた方限定で、192Hz/24bit 超ハイレゾ・デジタル音源も配信します：

WFHC-039-wav **追加頒布価格 1,000円**

(デジタル音源単独ではご購入できません。また配信はメールアドレス宛に行いますので、インターネットのメールをお使いでない方はご購入できません。)

(ご参考)

●1950.9.25 スtockホルムのフルトヴェングラー VPO 演奏会

！！拍手・放送アナウンス入り！！

①スウェーデン国歌・オーストリア国歌

②ハイドン：交響曲第94番「驚愕」

③シベリウス：交響詩曲「エンサガ」

④R.シュトラウス：交響詩「ドン・ファン」

⑤ベートーヴェン：交響曲第5番「運命」

CD No. WFHC009/10 (2CD) 4,800円 (2006/3) 2009/4 頒布再開



1949 年 12 月 18 日及び 1954 年 4 月 27 日のベルリン・フィルの定期演奏会ではブラームスの交響曲第 3 番が演奏されました。センターではこれまでこの曲の録音を頒布したことがありませんでしたが、ヘニング・スミット（オルセン）氏の貴重なテープ・コレクションを得て、ようやく CD 化に至りました。前回の 1952 年のエロイカでお聴きいただいたと同様、会場のバックグラウンドのノイズなども含め、市販版よりも情報量が多く、完全に正しいピッチで、フルトヴェングラーの演奏をじっくりお楽しみいただけると思います。



2. WFHC-040/43

フルトヴェングラー ブラームス交響曲第 3 番を指揮する 1949/1954

シューマン : 「マンフレッド」序曲
 ブラームス : 交響曲第 3 番 ヘ長調 作品 90
 フォルトナー : ヴァイオリン協奏曲
 ヴァーグナー : 《神々のたそがれ》からジークフリートの葬送行進曲
 ヴァーグナー : 《ニュルンベルクのマイスタージンガー》から第 1 幕への前奏曲
 (録音 1949 年 12 月 18/19 日 ベルリン・ティタニアパラスト)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

ゲアハルト・タッシュナー (vn)

指揮 : ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

ヘンデル : 合奏協奏曲第 5 番 二長調 Op. 6-5
 ブラームス : 交響曲第 3 番 ヘ長調 作品 90
 ブラッハー : 協奏的音楽
 R. シュトラウス : 《ドン・ファン》
 ヴァーグナー : 《トリスタンとイゾルデ》前奏曲と愛の死
 (録音 1954 年 4 月 25 日 ベルリン・ティタニアパラスト)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮 : ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

ご購入いただいた方限定で、192Hz/24bit 超ハイレゾ・デジタル音源も配信します：

演奏のピッチについてですが、実はこれらのテープには、オリジナル・テープに由来すると思われるハムノイズが含まれています。このノイズは交流を直流に変換する際に発生するもので、電源周波数の倍数の周波数で出現します。ヨーロッパの電源周波数は正確な 50Hz であり、両派整流回路から発生するハムノイズは 100Hz に最も強くでます。これが 100Hz からずれていますと正確なスピードで再生できてないということになります。ちなみに audite からリリースされたものは概ね 99Hz になっていますので、若干ピッチが低いということになります。今回も前回の WFHC-035/8 同様、このハムノイズを 100Hz になるように調整し、演奏時のピッチを正確に CD 化しています。

1. CDR 製作用原盤の制作にあたっては、「桧山コレクション」で使用してきているPlextor 社製作の CDR 焼成機の銘機「PlexMaster」により、パソコンなどの CDR 焼き込みでは到達できない純度の高い CDR 原盤を作成しています。
2. 頒布用 CDR 製作については、「桧山コレクション」で使ったプロ仕様のハイスペック CDR を使用し、更に原盤を忠実にコピーする「1：1 オンザフライ」プロセスにより、原盤の音を完全に再現することといたしました。



1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 申し込み期限は **2022 年 5 月 30 日（月）** です。原則として受注生産を行いますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
3. この CD はセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

お問い合わせの際は、①振込年月日、②振込金額をお知らせ下さい。

#####

センター既発盤についてのご感想

WFFC-0301R (ベートーヴェン 交響曲第9番 1937年ロンドン)について

会員 田井 竜一 氏

「ロンドンの第9」の方、早速きかせていただきました。

編集がとても素晴らしく、特にフルトヴェングラー独特の「間」の処理が、適切だとも思います。その結果、全曲をより安心してきけるようになりました。

音質も、ワーナーの「録音全集」のCD/ハイレゾ音源よりも、鮮明で、生々しく、かつ力強さがあり、一層優れているようにおもわれます。



会員 末廣 輝男 氏

「ロンドンの第9」聴かせていただきました。中・高音域の歪が以前の WFFC-0301 と較べてかなり減少し、カサカサしていた音に潤いがでてきて、音楽として楽しめるものになりました。また面繋ぎの編集も完璧に行われています。

このようなクリアな音で聴くと、やはりこれはクイーンズホールでのライブ録音ではないのでは、との疑問が強くなってきました。このホールはさほど大きくないホールだったようですが、この録音には聴衆の存在感が殆ど感じられません。

また、第4楽章コードのプレスティッシモがあまりに極端で、これは実演での演奏といふよりはリハーサルでの、やや誇張した表現ではないでしょうか。また、この演奏を実際に聴かれた大原総一郎氏は「テンポがゆっくりとしていて・・・哲学的遅さともいふべきものだった」という感想を記していたと思いますが、このCDで聴く限り、そんな感想が出てくるとはとても思えません。「最終リハーサルを兼ねて試し録りを行った」というのがやはり実態ではないでしょうか。

日フセンターの新盤の一番の特長は、ピッチが正常になったことだと思います。

WFFC-0301 17:07 11:00 19:33 23:56

WFFC-0301R 17:33 11:16 20:02 24:26

WARNER 17:41 11:21 20:12 24:54

因みに IMG 盤のカット個所（2 か所）や重複個所を補正してタイミングを計ると、

IMG (補修済) 17:32 11:12 20:01 24:17

となり、WFFC-0301R とほぼ似た値となります。

以前日フ協会盤を聴いて、なぜ日フ協会が「面繋ぎ」をしなかったのか、その理由がよくわかりました。この個人所蔵のテストプレス盤は「盤反り」がひどいものだったらしく、盤反りに伴う超低音の周期的ノイズがひどいのです。このノイズは面初で激しく面末で殆ど消滅します。そのためこのままでは面末と面初を繋げないのですね。

そこで低域カットフィルターを挿入してこの超低音ノイズを落とさなければいけないのですが、私の実験ではこのようにするとやはり楽音の重低音も削られてしまい、いささか「軽

その他、この録音は元々どのようなメディアに録音されたものか（光学フィルム説もあるようです）など、ロンドンの第9は分からないことが多々ありますね。

会 員 長谷川 健 氏

初出の1952年12月7日の「世界の調和」を含む二日間の全公演を、異なる放送局の収録であるにもかかわらず均質な音で楽しむことができました。改めて、初日のエロイカのすさまじい勢いとベルリンフィルの集中力に感銘し、40年ほど前にワルター協会原盤のコロムビア盤で初めて聞いたときの感激を思い出しました。

さて、私にとって望外の喜びだったのは、同時に購入した 1937 年のロンドンでの第 9 (WFFC-0301R) です。過去に大手レコード会社から出た復刻が、ことごとく第 4 楽章のテーマの繰り返しが一回多い「編集ミス」を伴っていたので、今回、それを正しく修正した復刻盤を買うことが一つの目的でした。もちろん、この目的は予定通り達成できましたが、イコライジングとダイナミックレンジの調整が非常に丁寧になされている本盤は、まったく別物の演奏を聴くかのような聞きやすさで大変驚きました。適切なピッチ調整も一役買っているものと思いますが、キレのある低音が全体に大変聞きやすく、テープ録音以前の古いライブ録音が完全に鑑賞に堪えるものに生まれ変わっていて、大変感激しました。第 3 楽章の豊かなフレージングや木管と弦との美しい対比は後年のものと比べても遜色ありませんし、終楽章の二重フーガを完璧なアンサンブルで畳みかける様子も、フルトヴェングラーとベルリンフィルならではのもので圧倒的でした。1937 年録音の復刻で、このレベルの仕上がりは本当に素晴らしく、会員以外に人にも是非聞いていただきたい名復刻と思わせる出来でした。以上、取り急ぎ、御礼かたがた簡単な感想まで、今後もよい企画を楽しみにお待ちしております。

フルトヴェングラー・センター 相談役 鈴木芳雄

0301R、拝聴しました。

「(ワーナー盤) 55CD」と「0301」の2枚と比較試聴しました。

5 5 枚盤の音はやっぱりそれなりに統一された方向だと思います。いわゆる CD の音と言いましょ。これに比べ、センター盤の 2 枚は押し出しの強い迫力のある復刻だと思います。例えば、ティンパニーに明瞭に現れていると思います。R 盤はその傾向が更に強くなるとともに、

ピッチ変更によるフィット感が高まったように思います。とは言え、私の耳ではピッチ変更の効果は残念ながら明確にはわかりません。

ただ、先にも書きましたが、つなぎの自然さとも相まって全体として演奏の「フィット感」が高まったと思います。よい意味でアナログの音を想起させます。考えてみると、当たり前で、元々が純然たるアナログですから。

皆さんご苦労様でした。

それにしても「0301」から何年経ったことでしょう。「0301」も結構いけると感慨深く思いました。

#####

WFHC-035/8, WFHC-035/8-wav

(1952年12月 ベルリンでのフルトヴェングラー) について

会員 田井竜一

「ベルリンでのフルトヴェングラー 1952年12月」(WFHC-035-038、およびハイレゾ音源ファイル(192kHz/24bit))が手元にとどきましたので、早速きかせていただきました。このセットには、次の4点の観点があるようにおもいます。

1. 1952年12月7日録音のヒンデミットの「世界の調和」は、録音の存在自体はしられていたものの、海賊盤もふくめて今まで一度も公にされたことがありません。今回は、世界初の公開になります。
2. 今回のセットには、1952年12月7・8日の2日間の曲目が完全収録されており、初めて両日の演奏・録音を、トータルに比較することができるようになりました。
ちなみに、筆者は、フルトヴェングラーの演奏をたのしむアプローチの1つとして、全演奏を年代順にきいていくのを、今までに何回かおこなってきました。そして、この両日の演奏会の再現をおこなう場合（もちろん当時は、7日録音のヒンデミットは無いままです）、各種LP・CDをかき集めることになります。その結果、音質はかなりバラバラになり、それは演奏の評価に少なからず影響をあたえていました（ごく最近になって、auditeの「RIAS全録音集」(21-403)により、8日の全曲目は、曲がりなりにも、まとまった形できくことができるようになりました）。
その点、このセットでは、同じエンジニア達が全曲目のマスタリングをおこなっているので、収録放送局の違いによる音質の差違は別として、全体をトータルな音質できき、演奏を評価することができます。
3. この演奏会でのベートーヴェンの「英雄」は、従来名演として評価されてきました。筆者は、特に7日の演奏が大好きで、フルトヴェングラーの全ての「英雄」の中で、さらにいうとフルトヴェングラーの全ての演奏の中で、1つをえらぶとすれば（こうしたことをいうこと自体ナンセンスであるといわれれば、それまでですが…）、この演奏をえら

ぶという程です。これらの「英雄」が、2日間の演奏会の全曲目の中で、どう位置付けられるのかということにも、興味深いものがあります。

4. 今回初めて、希望者には、CD-R の他に、ハイレゾ音源ファイル（192kHz/24bit）が、ダウンロード方式で追加配布されることになりました。

筆者は、この会報でもご報告してきましたように、フルトヴェングラー・センターが今まで配布してきた音源・映像資料で、ハイレゾ音源が収録されているものに関しては、音源ファイルを取りだして、WAV ファイルに変換し、PC オーディオで聞いてきました。それらは、高品質なものであっても、基本的には映像再生を主眼にしたブルーレイディスク・プレイヤーで再生するよりは、確かに高音質でした（筆者の使用している、パイオニアのBDP-LX88 では、同軸デジタル出力による、96kHz/24bit 出力が可能）。しかし、その作業では、何回ものコピーや変換をせざるをえず、それらによる音質劣化は否めませんでした。それが今回、ハイレゾ音源をダイレクトな形で入手できるのですから、嬉しい限りです。その意味で、CD-R とハイレゾ音源ファイルの音質比較も、大いに興味があるところです。

今回、これらの観点から、このセットを聴きすすめることにしました。

演奏の特色

まず7日の演奏ですが、冒頭のウェーバーの「魔弾の射手」序曲は、久しぶりの共演ということで、指揮者・オーケストラ双方に、手探り・様子見といったものが感じられます。けっして悪い演奏ではないのですが、全体的に安全運転といった趣があります。

これがベルリン初演であったヒンデミットの「世界の調和」では、両者はいつもの調子を取りもどしたようで、スケール感と迫力のある演奏が展開されています。また、ベルリン・フィルの演奏技術の凄さも特筆されます。

8日の「魔弾の射手」序曲は、冒頭からエンジン全開という感じで、気迫のある演奏が展開されます。7日の「世界の調和」は、それだけをきいていけば、見事な演奏です。しかし、8日のそれは、一層こなれた内容の演奏になっています。

一方、両日の「英雄」は、演奏会の前半に演奏された2曲とは、かなり趣を異にしています。7日の演奏は、推進力に富んでおり、音楽が動的・躍動的で、かつ要所要所のえぐりの深さが顕著です。特に第2楽章のスケール感と深遠さには、圧倒的なものがあります。それに対して、8日の演奏は、どちらかというところと静的であり、落ち着きや安定感、スケール感といったものが特徴的です。

既にのべましたように、筆者はこの演奏会の「英雄」が大好きで、今までにもよく両日の演奏の聴き比べをしていました。その時の演奏の印象は、先程のべたものとほぼ同様でした。さらに、8日の演奏は、7日のそれとくらべると、どうも大人しくて、覇気が無いようにおもえてなりません。さらにいうと、久しぶりの共演ということで、フルトヴェングラーは7日に張り切りすぎ(!?)てしまい、8日には疲れがでてしまったのではないかとおもったりもしていました。

しかし、今回2日間の全曲目を通してきいた結果、そうしたことはないことがよくわかりました。7日の「英雄」の演奏は、確かに躍動感に富んだものですが、演奏の運びやアンサンブルに、やや荒っぽいところがあることもまた事実です。

フルトヴェングラーは、そうしたことへの反省にもとづき、8日の演奏では、音楽の構造を、より安定した形で提示しようとしたようにおもわれます。その結果、しっかりとした構造の中に、内に秘められた気迫や力感、生命力が感じられる演奏になっています。そこに、2日間にわたる演奏会における、フルトヴェングラーの見識をみる思いがします。

ちなみに、今回の演奏会の直前におこなわれた、ウィーンでの復帰定期演奏会においても、私達は2日間のベートーヴェンの第1交響曲（11月29・30日）をきくことができます（特に、29日の音源（NUOVA ERA 013.6300、013.6305）では、冒頭に復帰したフルトヴェングラーをむかえる盛大な拍手と歓声がおさめられており、何回きいてもとても感動的です）。この11月29・30日両日の第1交響曲の演奏の差違が、12月7・8日の「英雄」とそれと相似していることは、とても興味深いとおもわれます。

音源の評価：7・8日の音源

まず、7日の音源から、検討してみたいとおもいます。今回のセットのマスタリングを担当された薬師寺純平氏がかかれた、「マスタリング・ノート」によると、7日の音源は極端に高音が強調されていたので、8日の音源の音に近づけるように、マスタリングをおこなったとのことでした。

そこで、従来の7日の「英雄」の代表的な音源とおもわれる、ドイツ・フルトヴェングラー協会のLP（F 666.848M）と、グランド・スラムのCD（GS-2130）を、改めて聴きなおしてみました。

そうしますと、ドイツ・フルトヴェングラー協会盤は、確かにとても鮮明な音質ですが、高音がかなり強調されていることがわかりました。ちなみに、この盤が高音質にきこえるのは、放送局音源を使用していることや、エレクトロラのすぐれたカッティング・製盤技術もさることながら、高音の強調に起因するものが大きいようにおもわれます。

なお、日本フルトヴェングラー協会のCD（WFJ-86-87）は、ドイツ・フルトヴェングラー協会から音源の提供をうけて制作したLP（WFJ-1）のマスター・テープを使用しているとおもわれます。ですので、本来ならば、ドイツ・フルトヴェングラー協会盤と同じような音質になるはずですが、しかし、高音域の強調を抑え、低音域が適切にでるようなマスタリングが施されています。

また、放送局保存音源から直接コピーした音源を使用しているとおもわれる、グランド・スラム盤も大変鮮明な音質です。しかし、改めてきいてみると、やはり高音域が強調されています。こうしたことから、旧SFB収録のテープをそのままの形で再生すると、このような音の状態になるとおもわれます。

今回のセットの7日の音源をきいてみると、高音域があまり伸びていなくて、鮮明感がやや不足しており、全体的にくすんだ音色であると感じました。ちなみに、この音質は、かつてこの演奏を初めてきいた、ロコロ盤（2050、日本盤：日本コロムビア OP-7508-RC）や、ディスココブ（ワルター協会）盤（RR-520、日本盤：日本コロムビア OW-7818-WS）の音質を彷彿とさせるものがあります。つまり、今回の音源を更にマルチ・コピーしたり、エア・チェックすれば、これらのLPの音源の音質に近い物になるというわけです。

しかしながら、演奏を聴きすすめていくうちに、そうした印象は、高音域が強調された、ドイツ・フルトヴェングラー協会盤を聴き過ぎた(!?) ことによる、一種の刷り込みに由来するものであり、むしろこれが本来の SFB 音源の音質ではないかとおもうようになりました。

確かに鮮明感や高音域の音の伸びは今 1 つですが、そのかわり当時のベルリン・フィルがもっていた、重厚な低音域の響きは見事にとらえられており、また楽器の音色も美しいです。

一方、旧 RIAS 収録の 8 日の音源は、高音域もよく伸びており、鮮明で、全体的に音のバランスがとても良い状態です。また、低音域もよくはいっており、音に生々しさがあります。全体的に、多少のヒス・ノイズと、若干の転写が見受けられますが、鑑賞には全く問題が無いとおもわれます。

なお、今回の音源で少々残念であったのは、一部の既存の音源に含まれている、楽章間の聴衆・演奏家ノイズ（7 日の「英雄」、グランド・スラム GS-2130 等）や、フルトヴェングラー登場の盛大な拍手と終演後の拍手（8 日の「魔弾の射手」序曲、audite 21-403 (CD)、キング KKC-10008 (SACD)、フランス・フルトヴェングラー協会 SWF-163 (CD)、SWF-D02 (ダウンロード・ハイレゾ音源ファイル) 等）が、全く含まれていないことです。もしこれらが含まれていれば、資料的な価値が一層高まったことでしょう。

音源の評価：CD-R とハイレゾ音源ファイル

次に、CD-R とハイレゾ音源ファイル（192kHz/24bit）の比較をしてみたいとおもいます。

私の再生環境は、以下の通りです。SACD/CD プレイヤーは、マランツの SA-14S1。PC オーディオは、Host PC（EGLOBAL ファンレス・ミニ PC（intel core i7 8565U 1.80GHz (4.6GHz)、Windows 11 Pro）+Diretta Target、DDCDAC は Singxer SU-2 + 同 SDA-2C（HDMI LVDS I2S/DSD 接続）、音楽再生ソフトは、Bug head Nontallion + MajorityClean。

CD-R は、Plex Master を使用した原盤製作や、プロ仕様のハイスペック CD-R の使用、標準スピードによる複製など、非常に丁寧にかつハイスペック仕様で製作されており、十分に高音質だとおもいます。

一方、ハイレゾ音源ファイル（192kHz/24bit）をきくと、情報量が多く、音が立体的で、スケール感があり、音像が大きく、エネルギー感に富んでいます。また、多数の音が重なった際の音の分離の良さ、低音域の充実、音の生々しさも特筆できます。一旦この音をきいてしまうと、もう元には戻れません。

ただ、コンピュータは元々音楽を高品質にきく道具ではありませんので、PC オーディオで音源をそれなりの音質できこうということになると、電源やケーブルの吟味、ノイズ対策など、様々な工夫が必要となりますし、そのため時間や費用も結構かかります。しかし、一定の環境を整備している方々には、ぜひハイレゾ音源ファイル（192kHz/24bit）をお聴きになることを、お勧めしたいとおもいます。

音源の評価：他の音源との比較

さらに、7・8 両日における「英雄」の、既存代表的な音源との比較も試みてみたいとおもいます。

既にのべましたように、7日の「英雄」の代表的な音源は、ドイツ・フルトヴェングラー協会のLP（F 666.848M）と、グランド・スラムのCD（GS-2130）であるとおもわれます。特に、ドイツ・フルトヴェングラー協会盤は、筆者が今までこの演奏の最高音質とおもっていたものです。いずれも、極めて鮮明な音ですが、オリジナル・テープに起因する高音域の強調があり、今改めてきくと、不自然さが感じられます。また、当時のベルリン・フィルの重厚な低音域の響きも、ほとんど聴きとることができません。

8日の「英雄」の代表的な音源は、auditeの「RIAS全録音集」（CD:21-403、SACD:キング KKC-10008）と、フランス・フルトヴェングラー協会のCD（SWF-163）、およびダウンロード・ハイレゾ音源ファイル（SWF-D02、96kHz/24bit）でしょう（この他、グランド・スラムのCD（GS-2229）も高音質ですが、音源の出自がはっきりしないので、ここでは割愛します）。

audite 盤は、再放送などに使用していた38cm/秒スピードのテープでは無く、保管庫に保存されていた、76cm/秒スピードのオリジナル・テープから再録されているので、スペック的には極めて有利です。しかしながら、音が平準化されていたり、聴衆・演奏者ノイズが取りのぞかれていたりする点に、違和感を覚えます。

フランス・フルトヴェングラー協会の音源では、音の鮮明さと力強さが顕著です。ハイレゾ音源ファイル（96kHz/24bit）ですと、その特質が一層よくわかります。ただ、結構音は触っているようで、デジタル色があることが気になります。

ブックレット・プログラム復刻

このセットのブックレットには、ヘニング・スミット氏と徳岡直樹氏による解説が掲載されています。特に、徳岡直樹氏によるものでは、現役の音楽家ならではの視点により、この演奏会の歴史的な位置付け、演奏の特質、今回の音源の意義が、実に的確にかたられています。これは、このセットの音源をきく際の、良きガイドになるとおもわれます。

ただ1つ気になったのは、私達会員は会報によって今回のセットが、ヘニング・スミット氏がフルトヴェングラー・センターに寄贈された音源にもとづいていることをしています。

しかし、そうした事柄が、CDケースにも、ブックレットにも全く記載されていません。パッケージ・ソフトは将来的には独立して使用されていくことになりますので、今後はぜひこれらの記載をお願いできればとおもいます。

またこのセットには、当時のプログラムの復刻がCDブックレット・サイズで添付されています。このCDブックレット・サイズというのは秀逸だとおもいます。原寸大は一見良い様におもわれますが、通常のCD保管場所に一緒におさめることができずやがて紛失すること必定です。その点このサイズならばCDケースにぴったりと収納でき、そうした心配がありません。

このプログラムは、ながめているだけでも楽しいですし、また演奏会の基本情報や当時の広告など、資料的にも大変貴重だとおもいます（ちなみに、7日の演奏会の開始時間が、日曜日の午前11時であったことを、私は初めて知りました）。

おわりに

今回のセットは、1952年12月7日録音のヒンデミットの「世界の調和」を初めてきくことができる点、7・8日の2日間の曲目が完全収録されており、全体をトータルな音質できき、演奏を評価することができる点、放送局音源のいわば「素の音」をきくことができる点、さ

品であるし、ヒンデミットの交響曲『世界の調和』もまた、当時は制作中のオペラから作られた。ヒンデミットの『世界の調和』には、新しい交響的な響きがあり、ベートーヴェンの『エロイカ』と同じように、カノンや変奏が魅力的だ。『英雄』交響曲もまた、ドラマティックな展開を見せるので、そういう意味では劇的な作品というのも3曲の共通点である。

『フルトヴェングラーの手記』（芦津 丈夫・石井 不二雄訳 白水社）では、休憩時間が果たす役割と、現代曲を含めた演奏順について、次のように述べられている。

「1927年 プログラム まず実際的であること。（中略）問題は曲の順番であって、その際に休憩がさらに一つの役割を演ずる。

それゆえプログラム編成そのものが知的尺度から言えば無意味であるのと同様、歴史的に組んだプログラムも、その他の外部から導入された観点も無意味である。決定的なのは、個々の作品がどこまでその権利を認められるかということだけである。しかし実際には、現代作品が古典作品の後に来ることは非常によく見られるが、その逆は稀である。」

交響曲『世界の調和』は、1957年に完成された同名のオペラに先立って、1951年に作曲された。ヒンデミットは、16世紀のドイツの画家、マティアス・グリューネヴァルト（1470/1475年頃-1528）を主人公にした歌劇『画家マティス』を1935年に完成させていて、この時も、オペラの素材を元に交響曲を1934年に作曲した。全5幕の『世界の調和』は、世界の調和を探究するドイツの天文学者・数学者・哲学者、ヨハネス・ケプラー（1571-1630）を扱った。タイトルはケプラーの著書 *Harmonices Mundi* (The Harmony of the World) から取られた。

交響曲は次の3つの楽章から成る。

I. *Musica instrumentalis* (Latin: Instrumental Music)

II. *Musica humana* (Latin: Human Music)

III. *Musica mundana* (Latin: Music of the World)

それぞれのタイトルは、古代ローマの哲学者、ポエティウス（480年 - 524/525）の著書『音楽綱要』から取られている。その中で、音楽は「楽器や声を通して実際に鳴り響く音楽」、「人間の肉体と魂の調和としての音楽」、「世界の調和としての音楽」に分類されている。第1楽章は序曲と第2幕への行進曲、ケプラーの母親が魔女裁判にかけられるシーンから、第2楽章はケプラーと、後に妻になる女性との会話の場面から作られ、雄弁に語りかけるかのよう

に始まる第3楽章は、第5幕の最終場面を使い、世界の調和を歌い上げて終わる。

『フルトヴェングラーの手紙』（フランク・ティース編 仙北谷 晃一訳 白水社）によると、1952年12月11日、巨匠はヒンデミットに、「長い曲ですから聴衆にはたいへんかもしれませんが、貴殿のこれまでの管弦楽中、最高傑作ではないでしょうか。当地でも明らかに成功でした。」と報告している。

今回の2回分の録音で特筆すべきは、アンサンブルの精度の問題ではない。どうやら後の日付の方がマイクのセッティングが異なるか、ホルン付近のマイクの不調が生じたようである。

7日のマイクは、8日の位置よりも遠いように、特にベートーヴェンで感じる。これが、『エロイカ』だけ7日の演奏を選択したドイツ協会の理由であろう。例えば、ベートーヴェンの交響曲第3番で、フルトヴェングラーが木管楽器の動きをホルンで補強した第1楽章の第113小節目以降の聞こえ方や、全体的な弦楽器の聞こえ方が大きく異なる。結果的には、ドイツ協会が採用した7日の方が、勇ましいホルンの音を全曲に亘って拾っている。両日のアンサンブルの精度については、大きくは変わらず、指揮者の望むリズム感や音を実現しようとオーケストラはベストを尽くしている。「8日の方が7日よりもアンサンブルが良い」という意見もあるが、8日のように、テンポが若干遅くなれば、当然、揃いやすくなるだろう。音楽的な説得力についても大差はないが、『世界の調和』の第3楽章については、より優れた金管楽器のソロを、7日の方がよく録音で捉えている分、説得力があるように聞こえる。

戦後のフルトヴェングラーのライヴは、年を重ねるごとに録音技術が良くなっていて、ここで聴ける『英雄』交響曲は、オーケストラの音色を生々しく伝える良い録音なのが魅力的である。同年11月にウィーン・フィルと商業録音された演奏との聴き比べが面白い。ベルリン・フィルが、巨匠の手足そのもののようであったのに対して、ウィーン・フィルとの演奏は、優れた芸術家集団とのコラボレーションのような魅力がある。ビブラートたっぷりで豊饒なベルリン・フィルによる弦楽器の音に対して、統一感があって美しいウィーン・フィルならではの弦楽器は、現在も保たれているウィーン・フィル固有の魅力である。特に、弱音では、音楽語法が同じウィーン・フィルの音には濁りが無くて美しい。一方で、指揮者の要求にダイレクトに答えるベルリン・フィルは、何を音楽で語るかをストレートに言い表している。ウィーン・フィルほどの統一感がない代わりに、豊穣な響きとなって、ウィーン・フィルとは別の魅力がある。

どっしりと安定感のある『魔弾の射手』序曲にも、1954年のウィーン・フィルとのスタジオ録音がある。巨匠が好んだ作品が、鮮明な録音で残されたことは、後世の我々にとって幸せなことである。今回の演奏会でも、フルトヴェングラーが望んだ音と音楽を、オーケストラの音色までよく分かる聞きやすい録音で楽しむことができる。それでも、私にとって強烈に印象深いのは1944年、大戦末期のベルリン・フィルとの演奏。旧フィルハーモニーを爆撃で失った直後、あの現実離れした描写が美しいラヴェルの『ダフニスとクロエ』の演奏と、まさに現実逃避したかのように、会場の観客、オーケストラと一体となって指揮者が演奏に没頭した

『田園』の前に演奏された壮絶な演奏。ここでは、同じ序曲とベートーヴェンの別の交響曲で『ダフニス』を挟む形で、描写を柱にしたプログラムを構成している。メロディアの初版LPは、古いマグネットフォン録音であっても、戦後の録音と同じように、冒頭でのホルンの四重奏で、重圧なCとGによる完全5度を土台にして共鳴したホルンの美しいアンサンブルを見事に伝えている。そして、これほどまでに、全曲にわたって、創造力溢れるクラリネットソロを中核にしながら、テンポが自然に、かつ大胆に変わる演奏は、1926年から幾つか残された巨匠の演奏の中でも他にはない。大きな緊張と弛緩を繰り返しながらの糸乱れぬ演奏は、ま

さにベルリン・フィルの歴史の中でも、最高の演奏水準を誇った時期であることを物語っている。

今回の2回分の演奏会を丸ごと収めたセットは、ピッチをきちんと揃えてくれたお陰で、比較すれば、テンポの微妙な違いがはっきりと分かるようになった。8日のベートーヴェンは、ステージの近くで聴いている気になって、迫力のある弦楽器を楽しむことができる。7日については、オーケストラの音をバランス良く捉えた録音なので、座席を移動しなくても、丸ごと一つのコンサートを楽しむことができる。



センター頒布のハイレゾ音源を聴いて

会員 加藤 幸弘

1 ついにハイレゾでの音源配信が開始される

センターの会報第61号で、CD-R（WFHC-035/8）に加え、ダウンロード方式によるハイレゾファイル（以下、「ハイレゾ」という。）についても追加価格を支払うことで入手できることとなった。私は頒布品をハイレゾで聴きたいと望んでいたことから、もう飛びつくような思いでCD-Rとハイレゾを入手した。

頒布された録音を再確認すると、Henning Smidth（オルセン）氏から寄贈を受けたオープンリールテープ音源による、1952年12月7日と8日にベルリンのティタニア・パラストでベルリンフィルを指揮しての演奏会のライブ録音で、プログラムは両日とも、ウェーバーの歌劇「魔弾の射手」序曲、ヒンデミットの交響曲「世界の調和」、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」となっており、2日間の全演目が収録されている。また、これの収録内容のうち、12月7日の「世界の調和」はこれまでリリースされたことがなく、今回が世界初登場音源であることも貴重である。

先にCD-Rが届き、ハイレゾのダウンロードが可能になるのを待ちわびて、ついに192kHz/24bitのWAVファイルを購入することができた。

2 頒布品のCD-Rとハイレゾの音

今回の頒布品のCD-Rとハイレゾとではどれだけ音が違うのか非常に興味があったので、さっそく聴き比べてみると、CD-Rの音は十分に良好で特段の不満を感じないが、さらにハイレゾを聴くと、2つの意味でのリアリティが増していることに気付いた。1つは音源のオープンリールテープの再生音に対するリアリティで、音の質感の再現性を増すとともに、より精緻な再現音であるため再生音の微妙なコンディションまでもが露わになっている。もう1つは当日の演奏の姿を再現するという観点でのリアリティで、楽音と楽音以外の音の分離が良く、音が緻密で、エネルギー感を増し、空間のリアリティも感じられるため、生の演奏の姿により近い音で聴けるのではないかとと思われる。

これに対し、CD-Rの場合はハイレゾほどのリアリティを有した音ではないが、ディテールの再現に限界があることによって、むしろ安定した再生音として聴くことができる面



米SPECTRUM SOUND（規格番号無し）

もあり、こちらの方が鑑賞に適した音ではないかと思われる向きをあるかもしれない。このことについては、非妥協的に真実追求を目指すのならハイレゾの音であろうし、ある程度整った再生音で鑑賞したいというのであればCD-Rの音にも存在意義があるのではないかと考える。

3 12月7日のライブ録音

12月7日の演奏は自由ベルリン放送（SFB）による録音が行われ、明快でキレの良い傾向の音質であるが、オーソライズ音源からのリリース機会が少なく、「英雄」がドイツと日本のフルトヴェングラー協会のLPで頒布されていたのと、仏TAHRAの複数の規格番号のCDに収録されている「魔弾の射手」と「英雄」がSFBライセンスを

標榜している程度であるが、残念なことに仏TAHRAのCDの音はそれなりのレベルにはあっても最善とまでは言えないと思っているところなので、初出の「世界の調和」も加えたこの日の全演目のライブ録音の頒布は貴重である。

「英雄」については、LPではドイツと日本の協会盤が決定盤的な存在であるが、CDについては十数種類のタイトルが発売されている中で音質が優れていると思っているのは同一音源を使用していると思われるカナダのDISQUE REFRAIN盤（DR-930065）と米HOSANNAのCD-R（HOS-02）である。

また、ドイツ協会LPの復刻盤である米SPECTRUM SOUNDのCD-R（規格番号無し）は、優れたLP再生音を聴くことができているが、これは販売機会が希でほとんど知られていないと思われる。他では米MYTHOSの同LP復刻のCD-Rが高域の加工が見られるものの高音質であり、とりわけプロ盤（NR-5026 PRO）は記録メディアにTDKのTHEORYや三菱化学メディアのGREEN TUNEといった高音質CD-Rを使用していて、さらに充実した音質で聴くことができる。

これらに対して今回の頒布CD-Rの音質は、上述のDISQUE REFRAIN盤、HOSANNA盤、SPECTRUM SOUND盤及びMYTHOS盤と比較しても音の情報量はそんなに増加している印象ではないものの、音の品位の点では大きく向上しており、現時点でこの「英雄」の最も音の良いCD（-R）ではないかと思われ、音の面でも音源の素性の良さを感じることができた。

さらにハイレゾを聴いてみると、オーケストラサウンドの緻密さ、各パートの演奏が聴き取れる解像度、自然な音場感など、リアリティを増した再生音により、当日の演奏の姿に近付けていると思われるが、無加工の音質ともいうべき味気なさや隣り合わせの音でもある。ハイレゾ時代になって初めてこういう再生音が聴けるようになったのであるが、旧来のオー

ディオの再生音とは趣が大きく異なるため、このハイレゾの再生音がどれだけ広く支持されるのかは未知数である。

4 12月8日のライブ録音

12月8日の演奏はRIAS放送による録音が行われ、非常に重厚な音質であるが、こちらはオーソライズ音源からのリリース機会に恵まれており、仏TAHRAが複数回CDリリースしていたほか、独AUDITE盤も放送局のオリジナル音源からのマスタリングを標榜しており、これらは音質面でも有利ではないかと考えられるところで、これに対し、今回の頒布品はHenning Smidth（オルセン）氏が所有していた音源であり、音質上不利ではないかと危惧する気持ちもあった。

試しにベートーヴェンの「英雄」を聴き比べていくと、RIAS放送の正規音源からのCD化は、前世紀から仏TAHRA盤が発売されていたが、2009年になって独AUDITEがフルトヴェングラーのRIAS放送全録音を収録した13枚組CD（21.403）をリリースし、この時点で最も音の良いCDであった。

さらに、2018年には12月8日の「英雄」のSACDシングルレイヤ盤（KKC-10008）が発売になり、CDよりも格段に優れた音質で聴けるようになっていた。

このSACDの発売で、音質面でも決定盤ではないかと思っていたところ、AUDITEでは、13枚組CDで発売していた全録音を48kHz/24bitのハイレゾでも発売しており、これも入手して聴いてみたところ、音の緻密さと反応の良さにおいてSACDシングルレイヤ盤を僅かに優っていると思われたので、これが聴きうる最良の音質だと思っていたところである。

これに対して、今回センターが頒布した音源は、ハイレゾの方であってもコピー音源をマスタリングしたものなので、条件としては不利であることは否めないが、実は、AUDITEのマスタリングは、かなりのデジタルプロセスを施しているようで、オリジナルのアナログマスターの音の質感が失われがちであった。

これに対し、今回のセンター頒布のハイレゾは元の音源に極力忠実と思われる音質で、コピー音源であるというハンディキャップを抱えながらも、元の演奏の姿を可能な限り忠実に伝えるという点においては、最も優れた音質と言えるのではないかと考えた。

RIAS放送音源に関しては、AUDITEの48kHz/24bitのハイレゾの音質がゴールのように思っていたが、今回のハイレゾリリースを聴くことによって、デジタルマスタリングの功罪が露わとなり、聴くポイント次第では、オリジナルマスター由来のAUDITEのハイレゾよりもフルトヴェングラーセンターのハイレゾの方がよいということは十分にあり得るのではないかと考えた。

5 マスタリングについて

以上述べたように、初めての試みであったハイレゾの音質は予想以上に優れた印象をもたらしてくれるものであった。ブックレットの説明によると12月8日の録音はウェルバランスだったのに対して、12月7日の録音は極端に高域が強調されていたので12月8日録音の音に近付けるようなイコライジングを行うとともに、ピッチ調整を行っているとのことである。

私自身は音源に対しては極力手を加えないで、多少の不備があってもそのままの音でリリースしてほしいと思っているものであるが、もとより線速度の調整により可能なピッチの修正については否定するものではなく、また、今回の12月7日の録音のように極端に高域が強調されているのを修正することは必要なことと考えている。

問題はマスタリングによって、音が好ましくない方向に変貌してしまうことがままあることで、とりわけ響きや音色のニュアンスはマスタリングの犠牲になりやすいのであるが、今回の音質はマスタリングの手が加えられていることを意識させないもので、マスタリング消極派の私にとっても十分納得できる音質に仕上がっていると思った次第である。



既発盤 WFHC-030 (バイロイトの第9 SACD) 及び
WFFC2005-HYM (《悲愴》など)について

(匿名希望)

帰宅後、予想より早く届いておりました。夜10時前くらいだったか、そのまますぐに2枚のCD、楡山コレクションの悲愴(WFFC、バイロイト第九聴かせてもらいました。最後にCDのブックレットをパラパラめくりながら時計を見ると既に1時前で慌てて食事、入浴、就寝した次第です。

どちらかのCDもすでにオーパス蔵、オルフェオで持っていますが、最近Naoki Tokuokaさんの動画で話題になる事もあるセンター盤とはどんなものか気になり、今回購入に踏み切りました。2枚共に予想以上の質の高さで、特に悲愴は分厚い低音と音の起伏の大きさに圧倒されます。オーパスの音源がSPかLPか詳しくは知りませんがこれほど違うとは思いませんでした。昔買い逃したEMIのSACDの悲愴を中古で探していましたが、これを聞くともう必要がないようにも感じます。繋ぎも手持ちのテレフンケンのSP復刻と比べとてもとても丁寧です。

バイロイトの第九はオルフェオ盤と比べとにかく音が伸びやか、鮮明音場が広く高域もシャープですがキツさが全くなく最後まで気持ちよく聴くことが出来ます。今回SACDでの試聴でしたが通常のCDでも印象は変わらないような気がします。今までルツェルンと比べるとバイロイトはちょっとという印象、(皆そうかもしれませんが)センター盤で聴くバイロイトはこれもいい演奏だと素直に思わせてくれます。

今回1回だけのつもりで入会しましたがこれほどのクオリティーであれば今後も継続したいと思います。また次回よろしくお願いします。

#####

<寄稿>

=== フルトヴェングラーの珍しいレコード ===

センター テクニカル・アドヴァイザー 清水公典

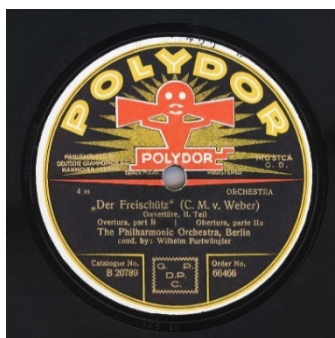
1926 年のヴェーバー「魔弾の射手」序曲に始まる巨匠のレコード録音は 1954 年のヴァーグナーの「ヴァルキューレ」まで行われ、幾多の歴史的銘盤が世界中の愛好者のもとに届けられた。数多く発売された SP (78rpm)、LP、EP レコードの中には思わず「エッ」と二度見してしまうような珍しいものがあるのでレーベルのイメージとともにご覧いただければ幸いである。

1) 独 Polydor 66466 ヴェーバー「魔弾の射手」序曲 1926 年録音

これは昨年センターの WFHC034 の DVD のギャラリーでお楽しみいただいたものであるが、Polydor では通常の赤色耳ラッパ人のほかに黒金文字のレーベルで発売していたのをワーナー社のプロモビデオで発見。66466 の Schallplatte Grammophon レーベル (69855/9 の「運命」のレーベル) は存在しない模様。

2) 伊 Fonit 社発売の R.シュトラウス「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」91024 と 91025 1930 年録音

3 面構成の SP で独 DGG の原盤。独 DGG(Polydor)社原盤の SP はドイツ以外では日本、米国、フランス、英国、イタリアで発売され、イタリアでは Fonit 社がプレスして発売。この Fonit 社の 2 枚組は入手してみると 91024 はれっきとした黒金文字の Polydor レーベルで Fonit 社名入り。91025 は Fonit レーベルで Polydor シリーズと表記されたハイブリッド構成。盤質、音質とも良好なレコード。



66466



66466 黒金文字



91024 Polydor



91025 Fonit

3) 日 Victor 発売のブラームス ヴァイオリン協奏曲 メニューヒン+ルツェルン祝祭 O 1949 年録音

日本 Victor から同一音源から SP の JAS255 と LP の LS2002 が発売されている。JAS255 のレーベルに書かれた番号の 12-1161-A は加 RCA 発売の 45rpm のドーナツ盤にも書かれていて同一の面割を示す。



JAS255-1



LS2002



WDM1361 赤盤

4) 英 HMV と独 Electrola の DB21174 のヨハン・シュトラウス「皇帝円舞曲」 1950 年録音

「桧山コレクション」の WFFC1903/4 で復刻された英盤と独盤ではカットニングが異なり、マトリックス番号も第一面で HMV の 2VH7202-1A に対して Electrola では 2VH7202-1-2 となっている。盤質、音質とともに独盤では丁寧に作り込まれた様子が見える。

5) 旧ソ連 (MK) 発売の D006637 マーラーの「さすらう若人の歌」 8 インチの LP 1952 年録音

これは英 HMV 音源を 8 インチの LP で発売したものでソ連以外の 8 インチ盤は存在しないと思われる珍盤。

さらに青色大松明のガスト 56 の方は 2 種類の価格表記になっている。これは 1961 年 1 月 1 日に実施された 1/10 デノミネーション対応のレーベルで 1961 年 1 月 1 日以降は 5.00 ルーブルが 0.50 ルーブルになると読み取れる。プリメロディアのガスト 56 表記盤では 10.00 と 1.00 の価格表記が見られるが 10.00 の方はこのデノミ前の発売であり、1.00 より古いことを示す。リガプレス盤は美しいデザインのレア盤。



DB21174 HMV

DB21174 Electrola

D006637 Torch

D006637 Riga

6) 仏 VSM の FALP617 と伊 VDP の QALP10216 ニッパーレーベルでない LP 1950 年他の録音

巨匠の EMI の LP と言えば His Master's Voice が不動のトレードマークだが犬のニッパーマークの商標権は各国の EMI または提携先のレコード会社が押さえていたため、独 DGG の SP で輸出用に Polydor レーベルを用いたように、仏パテ社では濃緑雄鶏 Pathe、伊 EMI では黒金 Odeon レーベルを使用したものが存在する。ニッパーマークを覆うように無粋な Odeon シール等を貼り付けたものよりずっと良心的なレコード。



FALP617 パテレーベル

同オリジナル

QALP10216 オデオンレーベル

同オリジナル

7) 仏 Decca の 220.037 フランク交響曲の疑似ステレオ盤 LP 1953 年録音

英 Decca の所謂 wideband groove 盤 LP と言えばステレオ優秀録音盤の代名詞。やはり巨匠の録音に真正ステレオもあったか？というのは早計でこれは Decca 社の疑似ステレオという大珍品。かなり茫洋とした音質でふわふわしており、オリジナルの LXT2905 の方が断然優れたレコード。



仏 Decca 220.037 LXT2905 オリジナル SET292 オリジナル

8) 東芝の HA1048 ベートーヴェン第一交響曲 1952 年録音

英 HMV の ALP1324 とともに発売枚数が少なく入手困難と言われた LP。筆者でも入手に 10 年以上かかったレコード。東芝の最初期 HA 番号の赤金文字レーベルは美麗この上ないもの。英 Angel 盤とアルゼンチン盤も存在する。



HA1048 ALP1324 AHA22 アルゼンチン LPC11857

9) 東芝 EMI の特典盤 EP BRC1009 モーツァルト「魔笛」よりアリア ヴィルマ・リップ 1950 年録音

このドーナツ盤 EP は東芝 EMI の CD 大全集の特典盤として出されたもので SP では未発売だったレコード。

東芝 EMI では EMI の SP 用マトリックス番号を尊重して EP 盤ながら SP 用の 2VH7223 と 7224 を刻印し東芝独自のマトリックス番号は付与していない。

10) 独 Electrola の WALPS1508 ベートーヴェン第九 第四楽章のみのレコード、同 E90088 の「運命」

欧州各国 EMI 間では委託生産がかなり広く行われていた。工場のプレス能力不足や虎の子の金属原盤の故障などが背景にあったかもしれない。WALPS1508 はドイツプレスのほかにもイメージのオランダプレス品があるが原盤は 2XRA19-1 というれっきとした初版の Electrola カutting。

Electrola のレコード番号ながら Electrora の表記はどこにもなく英グラモフォン社と書かれ、注記はオランダ語、曲名はドイツ語、ニッパ君はオランダプレス品特有の女性的なフォルムとユニークな構成のレコード。E90088 は WALP1195 番号も併記された仏 VSM (パテ社) カutting、プレスによる独 Electrola 社のレコード。フランスプレス品に Electrola が持っていた 商標の His Master's Voice を書くことはできなかったと推測される。



BRC1009 WALPS1508 E90088(WALP1195)

#####

マルチイコライザモノラルアンプ新製品（オーロラサウンド製）EQ-100 のご紹介 と特別販売のご案内

センター理事の薬師寺が開発に協力したオーロラサウンドの可変型マルチイコライザモノラルアンプ EQ-100 が 4 月 29 日から発売になりますが、フルトヴェングラーの会員の皆様へ、特別な割引をいただくことになりました。

EQ-100 は低域 10 ポジション、高域 10 ポジションを任意に設定でき、計 100 通りものイコライザーカーブを選択できる、モノ専用フォノイコライザーです。もちろん SP 盤のイコライジングにも対応していますので、フルトヴェングラーの SP、LP すべてに最適なイコライザーカーブで再生することが可能です。（疑似ステレオ盤もモノ再生されます）



初段にオペアンプの最高峰である Texas Instruments 社の OPA627 を採用し、ロールオフ NF 型、ターンオーバーに CR 型を採用することで、いかなるポジションにおいても正確なイコライジングが可能になっております。また、今では入手不可能なヴィンテージ半導体を使ったディスクリートタイプのバッファアンプを採用することにより、深く透明な音色を得ております。

なお、センターは製品の販売には関わりませんので、ご注文については以下のとおりフルトヴェングラー会員である旨お伝えいただいたうえ、直接オーロラサウンドにお申込みください。

商品詳細は「オーロラサウンド EQ-100」で検索してご覧ください。

<https://www.aurorasound.jp/images/EQ100%E6%96%B0%E8%A3%BD%E5%93%81%E7%B4%B9%E4%BB%8BSPdf>

各種仕様

入力	MC , ゲイン 63dB, 対応カートリッジ内部抵抗値 5Ω ~ 200Ω MM, VR-1, VR-2, ゲイン 40dB, 最大入力レベル 100mV MM カートリッジ負荷インピーダンス 47kΩ VR-1 : バリアブルリラクタンス型、負荷インピーダンス 15kΩ VR-2 : バリアブルリラクタンス型、負荷インピーダンス 10k
出力	RCA, 定格 2Vrms, 最大 10Vrms, 出力インピーダンス 47Ω すべての入力と出力はそれぞれ 2 づつありますが内部でモノラルに接続されています。
ターンオーバー特性	10 ポジション独立可変 Flat, 200Hz, 250Hz, 300Hz, 350Hz, 400Hz, 500Hz/12dB, 500Hz/16dB, 500Hz/20dB, 800Hz
ロールオフ特性	10 ポジション独立可変 Flat, -2dB, -4dB, -6dB, -8dB, -10.5dB, -12dB, -13.7dB, -16dB, -18dB at 10kHz
各フィルタ偏差	+/-0.5dB
周波数特性	10Hz ~ 30kHz -3dB , Flat position
THD+N	MM 0.01% @1kHz A-wt, MC 0.026% @1kHz A-wt
入力換算ノイズ	-138dBV MC 時入力ショート
各種機能	大型 MUTE スイッチ、Variable/RIAA 切り替え SW
電源電圧	電源内蔵、100V 50/60Hz、消費電力 20W
大きさ	W260mm x D250mm x H100mm 約 2.7kg、折り畳み式チルトスタンド付

お問合せ・お申込み先（フルトヴェングラー・センター会員である旨お伝えください）

〒241-0805 横浜市旭区都岡町 76-4 ロジュマンⅢ-102

オーロラサウンド株式会社 代表取締役 唐木志延^{しのぶ}夫

電話 045-953-6708 Email: karaki@aurorasound.jp

価格：~~248,000 円~~ + 消費税 → 225,200 円 + 22,520 円 = 247,720 円

《お願い・お断り》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。

◎郵便振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！

センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。

◎海外協会のものにつきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいております、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないような損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦ください。

◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。

◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



コペンハーゲン公演3日後 1950年10月4日ハンブルク公演での指揮姿

フルトヴェングラー・センター会報第63号 発行日 2022年5月

編集・発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士

名誉会員：ズーピン・メータ、クリスティアン・ティーレマン、パーヴォ・ヤルヴィ

アドバイザー：ヘニング・スミット（オルセン） 顧問：桧山浩介

会長・理事：中村政行 理事：呼川秀邦、市川悠一、大橋陽一郎、薬師寺純平、中村匠一（音響担当） 監事：鹿内浩胤

チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドバイザー：清水公典 相談役：鈴木芳雄、

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-660-33-444

郵便振込口座 00240-9-111630 E-mail: info@furt-centre.com URL: furt-centre.com